

<現代社会学科> (認定課程： 中学校1種(社会) )

(1)各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	1 Semester	この学期は、共通専門基礎科目群の履修と学部専門科目の基礎科目群の履修を通して、中学校社会科における学習を社会科学を構成する基礎知識の学修へと変化させていきながら、現代社会学部の基礎科目をリテラシーを中心に学ぶことにより、教職にとって必要な幅広い教養と思考力の基礎を得ることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「西洋史概説」や「東洋史概説」、「社会学入門」などの歴史・地理に関する基礎的科目や社会学・政治学・法学の基礎的科目を通して西洋、東洋それぞれの社会の推移について歴史学の成果に基づいて他者に説明できることを到達目標とし、「法学」などの当該分野の一般的包括的知識の修得も到達目標とすることで、中学校社会科で必要とする基礎知識を修得していく。また、現代社会学部が扱う多様な研究対象を読み解くための基本的な学びのリテラシーの獲得、社会学が扱う対象と社会学的思考について、現代の社会科学全ての方法論的基礎となる社会調査の方法についての包括的知識を修得することも到達目標とし、教職としての広い教養と思考力を養成する。
	2 Semester	この学期は、1年次前期に引き続き、共通専門基礎科目群の履修を通じた現代社会学部の根幹を支える基礎知識の学びを行いながら、1年次前期では、社会を総論として基礎的な概説として取り上げていた現代社会の諸課題がより具体的な社会学のフィールドにおいてどのように展開されているのかを学修することにより、現代社会の大きな問題と身近な問題のつながりを社会科の観点から導きうる教職として考える姿勢を涵養することを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、引き続き、歴史や地理についての基礎的科目のほか、「教育問題と学校の社会学」、「メディア社会学」などを開設し、1年次前期に修得した入門科目において示した社会学的思考が学生にとって身近な学校教育や情報メディアにおいて、どのように応用しうるかの基礎を学ぶ。「哲学概説」では、世の中に山積する決まった正解のない問題について哲学的道具立てを用いて各自が考え、必要に応じて意見を述べたりすることによって、中学校社会科で必要とする論理的な思考力と表現力、そして問題発見能力を養うことを目標とする。また、「生涯学習論Ⅰ」などの関連科目の履修も経ることにより、教職としての幅広い視野と身近な問題とを結び付ける思考力を養成する。
2年次	3 Semester	この学期は、1年次の共通専門基礎科目群と学部専門科目のうち基礎科目を中心とした学びを、基幹科目の履修を開始することにより、より具体的に社会を考えて、調べられるための知識とスキルを身に付ける学修を行うことを目標とする。さらに1年次にじっくり学んできた総体としての社会において、学校教育および教員が持ちうる役割や自身の進路も含めて、社会との関係をより密接に結びつけた教育像、学校像についての学修を行うことを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「自然地理学」「市民の政治学」など自然地理学の視点から地域環境をとらえ、諸地形について包括的知識を修得し、また市民の政治参加、とりわけ現代の若者の社会意識と政治参加について、政治学を中心とした理解をすることをめざし、地理学や政治的関係から社会の構造やそこで生活する市民について理解するだけでなく、その理解に導くための調査方法やスキルを修得し、社会科を教授するにあたり必要な知識と手法を身につける。「教職に関する科目」については履修が開始され、教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想を学び取り、現代の学校教育のあり方を自身の課題として追究するための資質を形成させる。また教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容、教職への道の選択肢を理解し、受講者自身の進路としての教職を真摯にとらえさせ、彼らの将来設計の重要な契機とする。
	4 Semester	この学期は、一年半かけて学生一人一人が身に付けてきた社会像を少人数授業であるゼミ(演習)の履修を開始を持って実際のフィールドに展開させていく学期である。さらに、そのなかで、教育と密接な関係を持つ家族、労働、グローバル化といったマクロな文脈についての専門科目と教育課程や学習・発達についてのミクロな科目の両者の履修を並行して行うことにより、教育のフィールドを中心にしながら、座学とフィールドワークの連携を行った学修をおこないはじめ、教職の実践に生かす知識と技法の基礎を修得することを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「家族社会学」、「労働とグローバル化の社会学」など学部の専門的な内容と相当性の高い科目の履修を通じて、社会学学修の専門性を深めながら、教職として、教育と関係の深い領域について学修を深める。「教職に関する科目」の履修においては、幼児・児童及び生徒の心身の発達および学習の過程を主に心理学的知見に基づいて学習し、合わせて障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程についても学ぶ。この学習を通して、多様な特性をもつ児童生徒を適切に理解できるようになるための基礎を形成する。さらに、教育課程の意義及び編成の方法の学びを通して、教育内容として扱うべき内容と、その意味、さらにその組み立ての原理を学び、授業づくりにおける教師の重要な役割を理解することも目標である。これらの科目の履修を通じて、現代社会学部の専門性の高い内容と教職の実践に求められる知識とを融合的に学修することにより、実践に生かす知識の修得を行うことを目標とする。

3年次	5セメスター	この学期は、知識を学修する点では、現代社会学部の学びの専門的学修の総仕上げ科目を複数用意しつつ、ゼミ(演習)や「社会調査実習」との連携を図りながら、学生一人一人がフィールドに出て調査を行うことにより、教職の現場に必要な自身をマネジメントするスキルの基礎を身に付けることを目標としている。また、教科教育法の履修を開始し、学校というフィールドで活躍できるように、技法面で一步踏み込んだ基本的スキルを身に付けることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、社会学の専門的学修の総仕上げの一つとして、「社会階層と教育の社会学」を開設し、社会の根本原理である社会の階層と教育の関係に焦点を当てて、自身で社会と教育の関係を自発的に考えられるようになることを目指す。また、地理学の地域調査にも通じるフィールドワークを実践し、現代社会学部での社会学を基礎とした学びを進展させて、地理学的あるいは文化人類学的フィールドワークへと展開できる方向性を開いている。「教職に関する科目」の履修においては、教育の方法と技術を学び、必要な教育情報機器及び教材の活用についても修得する。また現代の教育に対応する、教科に共通する授業設計の基本原則を学ぶとともに、効果的な授業の技法を学びとる。さらに道徳の授業では、学校の全指導場面で実践されるべき道徳教育を視野に入れた指導のあり方と方法を学ぶ。道徳学習の意義を理解し、道徳的価値の内面化を促す方法について知ることが目標である。教育法の科目では、教科の教育課程と特性に応じた実際の授業づくりにかかわる実践的な学習をする。学習指導案の意義と作成の仕方、それを基にした模擬授業とその内容の相互批評などを通して、授業準備の基本と実践的な指導力の基礎を身につけることを目標とする。また、その際、学習指導要領の理解を深めることによって暗記科目との誤解を解き、学習指導要領に定める教科の達成目標を個別授業の目標のうちに具体化する必要について、特に意識付けるものとする。
	6セメスター	この学期は、教育実習前の学期として、現代社会学部から学校に送り出して活躍できるような水準の知識とスキルを修得していることを学生一人一人が確認し、その達成度を具体的なフィールド活動を通じて実地検証を行う。これらの実践を重視した活動を通じて、教育実習およびその先の教職において就職した時点にて、十分な指導力を発揮しうる専門的見地に基づいた授業設計ができるようになることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、前期同様に、社会学の専門的学習の総仕上げの一つとして「コミュニケーションと自己の社会学」を開設している。またフィールドワークの科目も準備しており、フィールドワークから観察できる社会のあり方への理解を深める機会を学生たちが得られることを目標とする。「教職に関する科目」の履修では、教育に関する社会的、制度的・経営的事項を内容とした科目においては、公教育の役割を正しく理解しその目的に合致した学級経営、学校経営の視点をもつことが目標となる。さらに教育相談の実態と方法を、カウンセリング理解と合わせて学び、多様な問題を抱える現代の児童生徒の実態を理解し、問題に応じてどのような対応の選択肢があるかを知ることが目標とする。教育法の科目では、前期の学習をふまえて、積極的に指導案作りや模擬授業の機会を与えることにより、適切に授業目標を定め、授業設計ができるようになることが目標となる。
4年次	7セメスター	この学期は、「演習Ⅳ」および「卒業論文」の履修によって、学士課程履修の集大成として研究論文を、多面的かつ実証的考察の積み重ねとして作成していく。これにより教科に関する専門者であるとの自覚を形成しつつ、根拠に基づき考察し事象間の関連を他者に説明する力をさらに養うことを目標とする。これは、教師が「根拠に基づき考察し、事象間の関連を説明できる」よう生徒を導くにあたって、みずからがまず、そうした振る舞いを身につける鍛錬である。「教職に関する科目」では、生徒指導及び進路指導の理論と方法を学び、生徒指導面での教師の役割は生徒の問題行動への対応にとどまらず、発展的な適応も視野に入れるべきであり、進路指導も含めた統合的で展望のある生き方の指導の手立てと基本の考え方を身につける。教育実習では、十分な事前指導ののちに教育現場に参加することを通して、授業実践の基本的力量を身に付けると共に、生徒観を磨き、教師という職業の実態を理解し、教職への意欲を確かに持てるようになることが目標である。
	8セメスター	この学期は、「演習Ⅴ」および「卒業論文」において、学士課程履修の集大成として研究論文を、多面的かつ実証的考察の積み重ねを経た社会像として完成させる。これにより教科に関する専門者であることへの自覚を形成し、自己の経た思考過程を整理した上で、到達した結論やイメージをわかりやすく他者に向かって表現する学修を、教職課程を設置する学士課程として完成をはかることを目標とする。これは、教師が説得力をともなって生徒を導くことに通じた、表現力の鍛錬である。また、教職関連科目として4年間のキャリア、教育、社会の関係について考える授業を開講しており、各受講者が自身の将来に向けた答えを出す訓練を行う。「教職に関する科目」では、教育実習において、前期に記したものと同様の目標をめざした学習機会を設ける。さらに特別活動の指導法について、教科学習以外に生徒が育つ幅広い活動が学校には存在し、それを統合的に結んでいくことの意義と方法を事例に即して理解させる。「教職実践演習(中・高)」では、教師への旅立ちの確実な準備の機会としての科目である。受講生各自の、これまでの学習内容の修得を振り返り、不足している側面を補い、学習成果を実践と結びつける演習的活動を通して、実践的指導力の基礎を固めることが目標となる。

<現代社会学科> (認定課程： 高等学校1種(公民) )

(1)各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	1セメスター	この学期は、共通専門基礎科目群の履修と学部専門科目の基礎科目群の履修を通して、高校公民科における学習を社会科学を構成する基礎知識の学修へと変化させていながら、現代社会学部の基礎科目をリテラシーを中心に学ぶことにより、教職にとって必要な幅広い教養と思考力の基礎を得ることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「法学」、「政治学A」などを開設し、現代社会と法学的思考法の関係や政治学が扱う対象と政治学的思考について、それぞれ高校公民科で必要とする一般的包括的知識を修得することを到達目標としている。必修科目である「社会学入門」では、現代社会学部が扱う多様な研究対象を読み解くための基本的な学びのリテラシーを獲得することにより、教職としての広い教養と思考力を養成する。
	2セメスター	この学期は、1年次前期に引き続き、共通専門基礎科目群の履修を通じた現代社会学部の根幹を支える基礎知識の学びを行いながら、1年次前期では、社会を総論として基礎的な概説として取り上げていた現代社会の諸課題がより具体的な社会学のフィールドにおいてどのように展開されているのかを学修することにより、現代社会の大きな問題と身近な問題のつながりを公民科の観点から導きうる教職として考える姿勢を涵養することを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「教育問題と学校の社会学」、「コミュニティ心理学」などを開設し、1年次前期に修得した入門科目において示した社会学的思考が学生にとって身近な学校教育において、どのように応用するか、また隣接領域である心理学とどのような関係を取り結びうるのかの基礎を学ぶ。「哲学概説」では、世の中に山積する決まった正解のない問題について哲学的道具立てを用いて各自が考え、必要に応じて意見を述べたりすることによって、高校公民科で必要とする論理的な思考力と表現力、そして問題発見能力を養うことを目標とする。
2年次	3セメスター	この学期は、1年次の共通専門基礎科目群と学部専門科目のうち基礎科目を中心とした学びを、基幹科目の履修を開始することにより、より具体的に社会を考えて、調べられるための知識とスキルを身に付ける学修を行うことを目標とする。さらに1年次にじっくり学んできた総体としての社会において、学校教育および教員が持ちうる役割や自身の進路も含めて、社会との関係をより密接に結びつけた教育像、学校像についての学修を行うことを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「市民の政治学」、「マスコミの社会学」、「人間関係の心理学」を開設し市民の政治参加、メディア・リテラシー(メディアを読み解く力、メディアと批判的に対話する力)、人間関係を心理学的に分析する方法を量的、質的両面の研究方法などを包括的に理解することにより、高校公民科教員として、社会の諸場面に対応できる専門的知識とスキルを身に付けることを目標とする。「教職に関する科目」は2年前期から開講する。教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想を学び取り、現代の学校教育のあり方を自身の課題として追究するための資質を形成させる。また教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容、教職への道の選択肢を理解し、受講者自身の進路としての教職を真摯にとらえさせ、彼らの将来設計の重要な契機とする。
	4セメスター	この学期は、一年半かけて学生一人一人が身に付けてきた社会像を少数教授業であるゼミ(演習)の履修を開始を持って実際のフィールドに展開させていく学期である。さらに、そのなかで、教育と密接な関係を持つ家族、労働、グローバル化といったマクロな文脈についての専門科目と教育課程や学習・発達についてのミクロな科目の両者の履修を並行して行うことにより、教育のフィールドを中心にしながら、座学とフィールドワークの連携を行った学修をおこないはじめ、教職の実践に生かす知識と技法の基礎を修得することを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「労働とグローバル化の社会学」、「福祉社会学Ⅰ」などを開設し、現代の公民科教員が生徒に必ず提示できなければならないグローバル化が社会にもたらす影響や高齢化が社会にもたらす影響について、特に専門性を深めていき、教職として関係の深い領域について専門性を高める。「教職に関する科目」の履修においては、幼児・児童及び生徒の心身の発達および学習の過程を主に心理学的知見に基づいて学習し、合わせて障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程についても学ぶ。この学習を通して、多様な特性をもつ児童生徒を適切に理解できるようになるための基礎を形成する。さらに、教育課程の意義及び編成の方法の学びを通して、教育内容として扱うべき内容と、その意味、さらにその組み立ての原理を学び、授業づくりにおける教師の重要な役割を理解することも目標である。これらの科目の履修を通じて、現代社会学部の専門性の高い内容と教職の実践に求められる知識とを融合的に学修することにより、実践に生かす知識の修得を行うことを目標とする。

3年次	5セメスター	この学期は、教育実習前の学期として、現代社会学部から学校に送り出して活躍できるような水準の知識とスキルを修得していることを学生一人一人が確認し、その達成度を具体的なフィールド活動を通じて実地検証を行う。これらの実践を重視した活動を通じて、教育実習およびその先の教職において就職した時点にて、十分な指導力を発揮しうる専門的見地に基づいた授業設計ができるようになることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「コミュニケーションと自己の社会学」を開設している。この科目の履修を通じて、教育を取り巻く世界についてのミクロな関係性への専門性を深めていく。「教職に関する科目」の履修では、教育に関する社会的、制度的・経営的事項を内容とした科目においては、公教育の役割を正しく理解しその目的に合致した学級経営、学校経営の視点をもつことが目標となる。さらに教育相談の実態と方法を、カウンセリング理解と合わせて学び、多様な問題を抱える現代の児童生徒の実態を理解し、問題に応じてどのような対応の選択肢があるかを知ることが目標とする。教育法の科目では、前期の学習をふまえて、積極的に指導案作りや模擬授業の機会を与えることにより、適切に授業目標を定め、授業設計ができるようになることが目標となる。
	6セメスター	この学期は、教育実習前の学期として、現代社会学部から学校に送り出して活躍できるような水準の知識とスキルを修得していることを学生一人一人が確認し、その達成度を具体的なフィールド活動を通じて実地検証を行う。これらの実践を重視した活動を通じて、教育実習およびその先の教職において就職した時点にて、十分な指導力を発揮しうる専門的見地に基づいた授業設計ができるようになることを目標とする。「教科に関する科目」の履修においては、「コミュニケーションと自己の社会学」を開設している。この科目の履修を通じて、教育を取り巻く世界についてのミクロな関係性への専門性を深めていく。「教職に関する科目」の履修では、教育に関する社会的、制度的・経営的事項を内容とした科目においては、公教育の役割を正しく理解しその目的に合致した学級経営、学校経営の視点をもつことが目標となる。さらに教育相談の実態と方法を、カウンセリング理解と合わせて学び、多様な問題を抱える現代の児童生徒の実態を理解し、問題に応じてどのような対応の選択肢があるかを知ることが目標とする。教育法の科目では、前期の学習をふまえて、積極的に指導案作りや模擬授業の機会を与えることにより、適切に授業目標を定め、授業設計ができるようになることが目標となる。
4年次	7セメスター	この学期は、「演習Ⅳ」および「卒業論文」の履修によって、学士課程履修の集大成として研究論文を、多面的かつ実証的考察の積み重ねとして作成していく。これにより教科に関する専門者であるとの自覚を形成しつつ、根拠に基づき考察し事象間の関連を他者に説明する力をさらに養うことを目標とする。これは、教師が「根拠に基づき考察し、事象間の関連を説明できる」よう生徒を導くにあたって、みずからがまず、そうした振る舞いを身につける鍛錬である。「教職に関する科目」では、生徒指導及び進路指導の理論と方法を学び、生徒指導面での教師の役割は生徒の問題行動への対応にとどまらず、発展的な適応も視野に入れるべきであり、進路指導も含めた統合的で展望のある生き方の指導の手立てと基本の考え方を身につける。教育実習では、十分な事前指導ののちに教育現場に参加することを通して、授業実践の基本的力量を身に付けると共に、生徒観を磨き、教師という職業の実態を理解し、教職への意欲を確かに持てるようになることが目標である。
	8セメスター	この学期は、「演習Ⅴ」および「卒業論文」において、学士課程履修の集大成として研究論文を、多面的かつ実証的考察の積み重ねを経た社会像として完成させる。これにより教科に関する専門者であることへの自負を形成し、自己の経た思考過程を整理した上で、到達した結論やイメージをわかりやすく他者に向かって表現する学修を、教職課程を設置する学士課程として完成をはかることを目標とする。これは、教師が説得力をともなって生徒を導くことに通じた、表現力の鍛錬である。また、教職関連科目として4年間のキャリア、教育、社会の関係について考える授業を開講しており、各受講者が自身の将来に向けた答えを出す訓練を行う。「教職に関する科目」では、教育実習において、前期に記したものと同様の目標をめざした学習機会を設ける。さらに特別活動の指導法について、教科学習以外に生徒が育つ幅広い活動が学校には存在し、それを統合的に結んでいくことの意義と方法を事例に即して理解させる。「教職実践演習(中・高)」では、教師への旅立ちの確実な準備の機会としての科目である。受講生各自の、これまでの学習内容の修得を振り返り、不足している側面を補い、学習成果を実践と結びつける演習的活動を通して、実践的指導力の基礎を固めることが目標となる。